

備前西大寺会陽 元和二年（1616 年）枝牛玉の考察

岡山民俗学会 丸谷 憲二

1 はじめに

昭和 55 年（1980）に堤芳男先生が発見した備前西大寺最古のシンギは、岡山市教育委員会の『昭和 55 年 西大寺会陽記録保存報告書』と岡山県教育委員会の平成 19 年の文化庁への報告書『岡山県の会陽の習俗 総合調査報告書』に収録されています。しかし、同時に発見された枝牛玉については『西大寺会陽記録保存報告書』に小さな写真、『岡山県の会陽の習俗 総合調査報告書』には「下端は腐朽しており、原形をとどめていない」と報告されているのみです。

元和二年（1616 年）枝牛玉の形状分析「噛み砕いた跡」により西大寺会陽・最大の謎「西大寺会陽に参加すると、その年は風邪をひかない」という伝承を解明できました。仏教医学は口伝伝承です。薬用植物学・古代医学による調査研究内容をご報告致します。

2 古シンギはヤナギ 西大寺観音院の宝木（シンギ）伝承

『昭和 55 年 西大寺会陽記録保存報告書』の最も重要な記録が、『シンギの材質がヤナギ』と云う寺院伝承の公開です。

『昭和 55 年 西大寺会陽記録保存報告書』抜粋

『投げ牛玉は、枝牛玉、串牛玉とも云い、一般的には「くしご」と称され、柳の木を約 7 寸に切り二、三分角に割って作る。宝木の残り材をもって作ったという意味もある。』

3 古シンギの材質確認「ネコヤナギ」

私は「宝木の材質がヤナギ」だったという事実を始めて知りました。備前西大寺で「宝木の材質はヤナギ」と説明すると、話を聞いた人達は「この本は間違っている」と怒り出します。最古の宝木の現物を確認することになり、平成 4 年（1992）3 月 2 日に奥田一郎氏と根木市太郎家を訪問し、3 人で現物を確認し断面形状より「ネコヤナギ」と断定しました。西大寺観音院の正式伝承である「ネコヤナギのシンギ」は元和二年（1616）の 2 本しか発見されておられません。

根木市太郎様の説明では、根木家には先祖伝来の厨子があり厳封されており「扉を開くと目が潰れる」という伝承がありました。堤芳男先生の立会いで扉を開いたところ中から如意輪観音と 2 本のシンギが発見され、台座の銘に元和 2 年（1616）とありました。

『シンギの材質がヤナギ』との伝承を記録されたのは、根木修先生（岡山市教育委員会）です。根木修先生に「現物を確認されたのですか」とお聞きしたところ「観音院の伝承により書きました」との説明でした。



根木市太郎 様 小 古シンギ (ネコヤナギ)・大 比較用(シダレヤナギ)

4 古シンギ 「ネコヤナギ」

4.1 仏教医学と漢方薬

平成4年2月12日に『昭和55年 西大寺会陽記録保存報告書』を一読し、「備前西大寺の開基と会陽の全てが漢方薬で説明できる」と言う仮説「**仏教医学説**」ができました。

「代表的な漢方薬である牛黄と犀角に由来」していたからです。

平成4年2月16日に市川俊介先生（岡山市立オリエント美術館館長）から「**医方明**（仏教医学）は正しい。しかし、**工巧明**が先である。五明を勉強するように」、そして、奥田拓男先生（岡山大学薬学部教授）の指導を受けるように教示されました。

平成4年2月17日に「岡山の仏教と医療を考える会」代表世話人・向井信章先生から「**仏教医学の歴史、五明・医方明**」について、ご指導いただきました。

仏教医学「**医方明**」

仏教医学は「**医方明**」と呼ばれます。法相教学の「**瑜伽師地論**」の中に**五明**という学問分類法があります。「**五明**」とは仏滅後900年頃、中インドに生まれたアサンガ（無着）がマイトレーヤの降臨説法により五部の論書を書き、その一が「**瑜伽師地論**」です。

五明とは、**医方明**（医学・薬学）、**因明**（論理学）、**声明**（文法学・文学・音楽）、**工巧明**（工学・技術・天文学・呪術・占相）、**内明**（仏教教義学・哲学）の五つの科目です。**工巧明**とは、加持祈祷の説明です。

天平勝宝3年（751）成立の「**懐風藻**」に僧を讃える時「妙しく三蔵の玄宗に通じ、広く五明の微旨を談ず。」とあり、**五明に通じていることが鑽仰の対象**とされていました。

空海の**綜芸種智院**においても五明が授けられています。日本には**斉明天皇7年（661）に道昭**

が伝えました。

平成4年3月14日、奥田拓男先生(岡山大学薬学部教授・生薬学)の教示。

「ヤナギには秘密がある。中国・インドでは漢方薬であるが日本では漢方薬では無い。何か秘密があるはずだ。私の言う漢方薬とは厚生省認可の漢方薬のことである。」

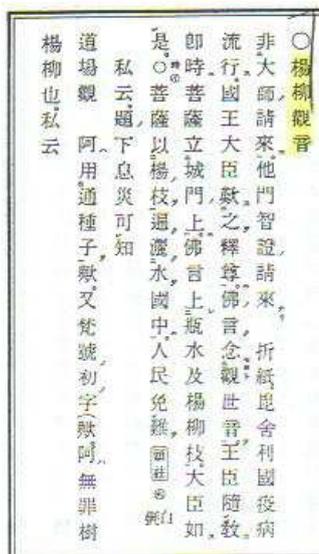
私は生薬学の第一人者である奥田拓男先生の教示に自信を深め、本格的研究がスタートしました。

4.2 西大寺観音院の本尊 千手観音とヤナギ

西大寺観音院の本尊は千手観音です。正確には千光眼観自在菩薩です。『千光眼観自在菩薩秘密法経』に「若欲消除身上衆病者。当修楊柳枝薬法。其薬王観自在像。相好莊嚴如前所説。唯右手執楊柳枝。左手当左乳上顛掌。画像已。印相右手屈臂。諸指散垂。」とあり、伽梵達摩訳『千手千眼観世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經(国譯秘密儀軌)』に、「若し身上の衆病を消除せんと欲はん者は、常に楊柳薬の法を修すべし」「若し身上の種々の病の為ならば、常に楊枝の手においてすべし」と説明しています。

4.2.1 楊柳観音

奈良・大安寺の国宝・楊柳観音が有名です。三十三観音の一つ楊柳観音のみが、なぜ「柳の木という材質名がついているのか」に注目しました。『安流伝授紀要第四』に「楊柳観音」の説明があります。



大安寺 所蔵・国宝・楊柳観音

4.2.2 楊柳枝観音

『小野類秘鈔身』に「楊柳枝観音」があり「付請観音経事」とあります。仏典の内容は、毘舍離国(東パキスタンの西隣のビハール州)で大悪病が流行した時の、起死回生の甘露水(楊枝水)の逸話です。「後趙の石勒の子が俄かに病んだ時、仏圖澄楊枝を取って水に沾して酒ぎ、遂に蘇生したという古事」、ヤナギの治療方の説明です。

4.3 薬用植物学のネコヤナギ

4.3.1 カワヤナギの薬効

『原色牧野和漢薬草大図鑑』昭和63年 北隆館	
薬用部分	樹皮 根 葉
成分	配糖体のサリシンのほか、サリチル酸、タンニンなどが含まれます。
薬効と薬理	タンニンを含み、収斂、解毒、利尿などの作用があります。 サリチル酸類による殺菌作用等もあります。
枝	消炎・利尿・鎮痛・去風の効果があるとして肝炎・黄疸に使用。
葉	清熱・利尿・解毒の効果があるとして乳腺炎・尿白濁・高血症に使用
花	止血作用があるとして吐血・血便・血尿などに使用。
根	利尿・去風薬として水腫・排尿痛・黄疸・リウマチなどに使用。
樹皮、根皮から コルク皮を除いたもの	消炎・鎮痛・去風の効果があるとして黄疸・リウマチなどに使用。

小泉秀夫著『新編薬用植物学』では、カワヤナギの薬効は「生薬を煎服せば、**感冒の収斂性解熱剤又解熱性利尿薬**となり、苦味健胃薬となる。収斂薬として助膜炎・骨膜炎・腫物・打撲等に煎罨法剤とし又浴湯用とす。」とあります。「内用には、1回1～4g、外用には、10倍煎液とす。楊皮を主とし葉重是。」

4.4 川柳(水楊・すいよう)

中国名の水楊とはカワヤナギ、ネコヤナギのことです。古名はユヤナギです。

世伸堂薬局(新潟県上越市)では、国産のカワヤナギ500gを刻み生薬として販売しています。漢方相談処 坂本薬局(山梨県甲府市)でも生薬として販売しています。川柳(水楊)は、明治・大正時代には一般に使用されていました。試飲しましたが口当たりの良い薬効のある漢方です。

川柳(水楊)	カワヤナギの葉枝・細枝	収斂・解熱・利尿	5～8g/日・煎剤
--------	-------------	----------	-----------

備前福岡郷土館(岡山県瀬戸内市 平井方策先生の医院跡)に、明治・大正・戦前迄、治療に使用されていた水楊が残っています。



水楊 備前福岡郷土館蔵

『本草綱目』は明の李時珍(1518～1593)著です。李時珍は中国医学が世界に誇る薬学

者で、一開業医として生涯を送り本草学を研究し、全国を採取旅行し薬木・薬草を集め27年がかりで完成したのが『本草綱目』全52巻の大著です。

『本草綱目』の「水楊」の説明	
釋名	青楊、蒲柳、蒲楊、蒲多、多柳、蕉苻
氣味	苦、平、無毒
主治	赤白痢。用水楊枝葉搗汁一升服。一天服兩次。
	痘毒不發，用水楊枝葉五斤，煎湯温浴，水冷換熱，痘瘡逐漸行漿貫滿。如不滿，可多浴 幾次，力弱者，只洗頭面手足。内服助氣血藥，效果好。
	刀傷成瘡。用水楊木白皮焙乾，搗碎為末，每服一匙，水送下，一天服三次，同時用末敷 瘡上。
	乳癰。用水楊根生搗，貼瘡幾次即愈。

5 楊柳浄水・楊枝香水・得大靈驗

私は『請觀音經』の中の「楊柳浄水」の解析が仏教医学の最重要課題であると考えます。

『弘法寺修正会法則』では、「楊枝香水・得大靈驗」とあります。華道・生け花をされている方には、花瓶にネコヤナギを挿しておくこと、約1週間で根が生えてくることは周知の事実です。私はガラスの花瓶にネコヤナギを挿しました。約1週間で根が生えてきました。そのままの状態でも6ヶ月間放置しました。6ヶ月間放置後の写真です。花瓶の水は、6ヶ月間たっても腐りません。透明なままです。正に「楊柳浄水」です。花瓶の水が腐らずに透明なままということは、物凄い殺菌効果があるということです。この花瓶の水を楊枝水と呼びます。「起死回生の甘露水。楊枝を沾した水。後趙の石勒の子が俄かに病んだ時、仏圖澄楊枝を取って水に沾して酒ぎ、遂に蘇生した」という古事。

私は、この楊枝水が古代における万能薬であったと考えます。



楊枝香水（楊柳浄水・楊枝水）・6ヶ月放置後

6 元和二年（1616年）枝牛玉（ネコヤナギ）の考察

西大寺觀音院会陽では、宝木争奪戦の前に「枝牛玉の争奪」が行われます。枝牛玉の形状は割り箸に似ています。現在では、枝牛玉を取得しても何の価値もありません。私は奪い合うのだから、昔は「奪い合うだけの価値があった」と考えました。

6.1 「牛玉積み」と「ネコヤナギ」

『西大寺会陽記録保存報告書』には『大正の初め頃までは、当日世話方が集まり、すでに作り上げている牛王串（串牛玉あるいは枝牛玉）を本堂に運び、本尊の左右の須弥壇上に積み上げる事が主な行事であった。その数は3万本もあったと言われ、昭和の初め頃までは寺内で、事始の事を「牛玉積み」と言っていた。』とあり、3万本とは参詣者の全てに1本ずつ授与可能な数量です。この記録により、西大寺会陽で一番重要な行事が「枝牛玉の授与」にあることがわかります。江戸時代には牛玉宝印紙用の和紙は貴重品であり入手困難でした。しかし、ネコヤナギは吉井川で大量入手が可能でした。

6.2 枝牛玉と楊枝(齒木)

西大寺観音院の枝牛玉の材質であるネコヤナギと、その形状に注目し枝牛玉と同一形状の物を探し発見しました。西アフリカの「コートジボアール共和国とセネガル共和国」にありました。それは齒木（楊枝）でした。

根木市太郎様の左手の「枝牛玉の形状」に注目して下さい。「噛み砕いた跡」がわかります。齒木（楊枝）として使用されていたことを証明する唯一の現物発見です。大阪の国立民族博物館蔵の「御楊枝 高野山奥の院」の形状も同一です。



天明4年(1784)・枝牛玉



元和2年(1616)枝牛玉 「噛み砕いた跡」



インド バシール 齒木
コートジボアール共和国



高野山 御楊枝 奥之院



齒木加持 灌頂用齒木

比叡山延暦寺や高野山金剛峰寺において、僧侶になるときに歯木を噛む「歯木加持（しもくかじ）」が行なわれます。歯木はサウジアラビア・インド・パキスタン等の、仏教国とイスラム教国で現在も日常的に使われています。インドの歯木はニーム（学名:Melia Azadirachta 種別:センダン科）・バブール・バシール等です。

ニームはインドの薬用植物の代表であり、若い枝・樹脂・根の皮・若い果実・堅果・種子・花・葉・樹液など、薬物として木全体が使用されています。この樹液は、グルコース・サッカロース・ゴム質・カリウム・フッ化物・蛋白質及び灰分から成り、油は脂肪酸のグリセライド・酪酸・バレリアン酸・レジン・アルカロイドを含んでいます。抗炎症効果、抗菌作用があり、生木の小枝の端を噛んで使用します。ニームの薬効としては、糖尿病、肝機能障害、解毒、生理不順、リウマチ、腰痛、ハンセン病、蕁麻疹、湿疹、丹毒、皮膚病、強壮などです。最近の研究でニームの樹皮に抗癌作用があることが確認され、日本でも研究が進められています。葉や種子は殺虫、駆虫剤です。

6.3 宝暦2年(1752)西大寺観音開帳「歯抜薬売」

池田家の見回り帳である『撮要録』に「宝暦2年(1752)西大寺観音開帳」の記録があり、「歯抜薬売」との記録があります。これを「歯抜薬」つまり、「痛み止め」と読みました。

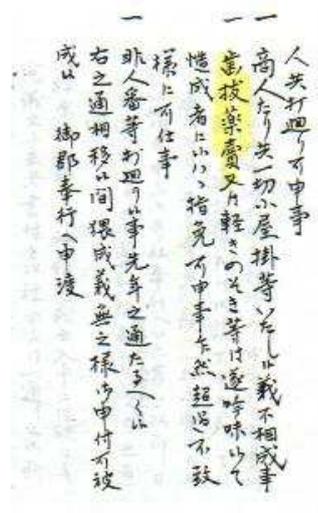
「1752年の鎮痛剤は、何が使われていたか」と考えました。

「ヤナギが使われていたはずである。」と考えました。

湯原良通先生（湯原歯科医院・岡山市西大寺）にコピーをお見せしました。湯原先生のご指導は「河内長野へ行け。つまようじ資料館へ行け」でした。まさに命令です。

平成7年8月12日に㈱広栄社 つまようじ資料室（大阪府河内長野市）の稲葉 修先生をご訪問しました。

このご指導のおかげで、「枝牛玉の謎」「風邪・伝承の謎」を解明できました。



7 「西大寺会陽に参加すると風邪をひかない」仏典による証明

「十誦律卷第四十」『国訳一切経 印度撰迷部律部六』	
仏は言われた「楊枝を噛むことを許す」	
それには五つの利点がある。 一には、口が苦くならない。 二には、口が臭くならない。 三には、風邪を退治する。 四には、熱気を除く。 五には、痰を除去する。	さらに、また五つの利点がある。 一には、風邪を退治する。 二には、熱気を除く。 三には、食べ物がおいしい。 四には、よく食べることができる。 五には、眼がはっきりする。

8 まとめ

① 仏教伝来と共に日本に伝来した歯木が、現在でも会陽という祭りで授与されていることに仏教学上重要な意味があります。

② 「歯木・楊枝授与」が「会陽の起源」です。枝牛玉（歯木）を噛み砕き生木（ネコヤナギ）の薬効成分を吸収します。生木を使用するのは古代インド医学・アーユルヴェータ医学です。

③ 西大寺観音院の坪井全広住職は「牛玉を授ける西大寺会陽」と教示されます。私はネコヤナギの薬効から「牛玉＝ネコヤナギを授ける西大寺会陽」と解します。

「ネコヤナギは牛玉＝牛黄（ごおう）の代替薬」です。西大寺観音院住職による工巧明、加持されたネコヤナギです。ネコヤナギは古代・中世における万能薬でした。

④ 西大寺観音院会陽とは、本尊である千光眼観自在菩薩信仰『千光眼観自在菩薩秘密法経』の「若欲消除身上衆病者。当修楊柳枝薬法。」を「楊柳観音＝シンギ」と「楊柳枝観音＝枝牛玉（歯木）」として企画立案された仏事・「楊枝供養会」です。

⑤ 仏陀（釈迦）はアーユルヴェータの名医（ジーヴァカ）を起用し、修行僧の健康管理、信者の施療に大変な努力をされました。アーユルヴェータ医学は、仏教とともにネパール、チベット、中国、朝鮮を経て日本へ伝来しました。アーユルヴェータ医学は、仏典の中にも既に入っています。僧侶たちの生活規律を説いた仏典に取り入れられています。しかし、アーユルヴェータ医学・密教医学は仏教系大学では、講義されておりません。

⑥ 「善光寺縁起第一 当巻明天竺百濟利益」に楊柳伝来史が書かれています。「真珠薬を楊柳の枝で国中に撒いて疫病を治し」とあります。この縁起の成立は室町時代初期です。宝木との表記は文政3年(1820)からであり、それ以前は真木と表記され、昭和6年の「祝い主資料」では、真木と宝木が併用記録されております。真木の真は真珠薬を意味します。



出納帳に「真木」との表記 「三月二日 宝木頂戴ニ付 寺へ交渉」
※「宝木」は昭和6年には「シンギ」とは読まれていなかった。

⑦ シンギの原型 「牛玉加持作法の執牛玉 ネコヤナギ」

シンギの原型が執牛玉（しふごおう）です。最初は「牛玉 西大寺 寶印」と刷られた

牛王宝印紙の授与でした。天正年間（1573～1592）以降、元和2年（1616）に至る過程の中で牛王宝印紙を遠方の参拝者に授与するために、錘として住職の手元にあった木の棒執牛玉（しふごおう＝ネコヤナギ）に牛王宝印紙を巻きつけて投下し、この木の棒をシンギと呼ぶようになりました。住職の手元にあった木の棒とは、修正会の後夜導師作法、牛玉加持作法に使用する「執牛玉」でした。仏教用語は呉音で読みます。「執」は「シフ」と読み、「執」とは「手にとる」の意味です。「手にとる牛玉」です。つまり、牛玉とは「木の材質であるネコヤナギ」を意味します。「執牛玉」は「宝印を手に取り、牛玉紙の五ヶ所に押す所作」に使用されます。語源は心木（中心の木）です。



執牛玉 「ネコヤナギ」

- ⑧ 仏教医学は口伝伝承です。高野山真言宗においては現在も口伝が生きています。「特に重要なことは、記録に残さないで口伝する」のです。（稲谷祐宣先生教示）
- ⑨ 「西大寺会陽に参加すると風邪をひかない」という伝承が最大の謎でした。ネコヤナギが、その謎を解いてくれました。ヒポクラテスが紀元前に鎮痛目的でサリチル酸を含む柳の葉を煎じて患者に飲ませた記録が残っています。ドイツのバイエル社で開発された鎮痛解熱薬アスピリンはヤナギに含まれるサリチル酸から合成された薬剤です。

9 補記

9.1 会陽の初見と語源

会陽の初見は安政元年（1854）の池田家文書の法制訴訟文書『御穿鑿者口書』です。

『御穿鑿者口書（おんせんさくしゃ くちかき）』 瓶井山会陽の記録	
ゑよふ	文化11年（1814）
栄耀	天保元年（1830）
会陽	安政元年（1854）

穿鑿所（せんさくしょ）とは江戸時代に罪人を取り調べる白州のことです。

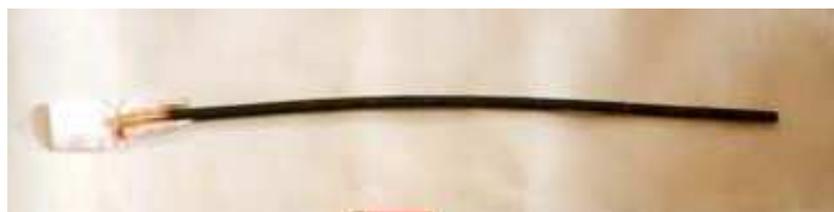
会陽は「ゑよふ」の当て字であり字音仮名遣いです。岡山県で初めて発行された新聞、山陽新報の明治12年2月7日（1879）付の紙面「論説 西大寺村観音会陽能利害」に採用され、『絶妙の当て字』であるがゆえに定着しました。「備前会養」寛政6（1794）『中陵漫録卷之五』の「会養」が正しく、語源は「供養会」です。

9.2 四天王寺 どやどや 「コリヤナギ」

会陽では「楊枝(齒木)である枝牛玉」のある寺社が最も素朴な古い形態です。しかし、それよりも古い形態の「樹脂付丸棒」が、四天王寺の「どやどや」で奪いあう「楊枝=コリヤナギ」です。「どやどや」で奪い合う牛玉杖(牛玉柳)は楊枝と呼ばれます。戦前の「どやどや」では裸の中へ数百本の楊枝が投入されていました。修正会の結願日に参詣者に牛玉宝印楊枝を授与します。インドで現在も使用されている齒木と同一形態です。三重県名張市の造園業者を指定してコリヤナギを栽培しております。



楊枝の先端に牛玉宝印紙



楊枝の材質 コリヤナギ

9.3 漢方医学と古代インド医学

漢方薬は薬木・薬草を乾燥させて煎じて服用します。古代インド医学では若木(生木)を噛むことにより薬木の樹液成分を飲み込みます。

9.4 三十三間堂の頭痛お守り 楊枝浄水供 「シダレヤナギ」

蓮華王院三十三間堂の『楊枝浄水加持大法要』説明文に、「三十三間堂は、古来より頭痛山平癒寺と通称され、殊に頭痛封じのご利益を授ける寺として巷間の信仰を集めています。」とあります。私は「除病の霊木・柳入り・頭痛封じのお守り」を購入しました。お守りの説明文に、『このお守りは、「楊枝加持」に因んで、当院の柳の枝を加持して消伏毒害陀羅尼経一卷を収めた効験ある頭痛封じのお守りで、蓮華王院三十三間堂に伝わる独特のものであります。頭痛に悩む方は是非肌身につけて癒してください。』とあります。お守りを開封したところ中身は「水楊」備前福岡郷土館蔵と同一形状でした。



9.4.1 シダレヤナギの薬効

シダレヤナギは「中国からの外来種」です。中国中南部が原産で揚子江畔に多く見られ、日本には遣唐使が中国より持ち帰りました。目的は薬木として利用するためです。

『原色日本薬用植物図鑑』木村康一 昭和56年 保育社	
薬用部分	枝 葉 花 根 樹皮、根皮からコルク皮を除いたもの。

成分	配糖体の サリシン を多量に含んでいる。
薬効と薬理	
枝	消炎・利尿・ 鎮痛 ・ 去風 の効果があるとして尿白濁・肝炎・黄疸に使用。
葉	清熱・利尿・解毒の効果があるとして乳腺炎・尿白濁・高血圧に使用
花	止血薬として吐血・血便・血尿などに使用。
根	利尿薬・去風薬として水腫・排尿痛・黄疸・リウマチなどに使用。
樹皮、根皮からコルク皮を除いたもの	消炎・ 鎮痛 ・ 去風 の効果があるとして黄疸・リウマチ・歯痛などに使用。

小泉秀夫著『新編 薬用植物学』では、「内皮を煎出し罨法料、又浴湯用とし凍傷・リウマチス・ヒゼン・ニキビ・水虫を治す。内皮を煎服せば黄疸・湿疹・特に**感冒の解熱利尿薬**となる。葉を煎服せば**解熱薬**となり、洗滌せば筋骨を續き・肉を生じ・瘤を止む、又悪瘡・漆瘡を治す。汗疣に白桃葉及十葉の葱葉と共に浴湯料として有効。」とあります。

10 おわりに

備前西大寺会陽最古の枝牛玉の形状分析「**噛み砕いた跡**」から、「何故、**枝牛玉**を噛み砕くのか」を仏典から調査し、西大寺会陽・最大の謎「西大寺会陽に参加すると、**その年は風邪をひかない**」という伝承を解明できました。別格本山西大寺の坪井全広住職にご指導戴いたのが平成4年2月11日です。それから数多くの先生にご指導戴きました。

特に**仏典**については、稲谷祐宣先生(医王山正通寺)・笹尾正道先生(真言律宗総本山 西大寺)・中西広道先生(和宗総本山 四天王寺)・大山仁快先生(持宝院)、多紀顯信先生(蓮華王院妙法院)、**基本調査**については八尋和泉先生(九州歴史資料館)、**アスピリンとヤナギ**については須見洋行先生(日本工業技術振興協会 JTTAS 天然物生理機能素材研究委員会 会長)にご指導戴きました。最後に服部陽一先生、佐藤米司先生、難波俊成先生に深く感謝致します。今回の発表について後押ししていただいた遠部 慎先生(北海道大学埋蔵文化財調査室)、五味田裕先生(就実大学副学長 薬学部長)に深く感謝致します。

11 参考文献

基本文献

- ① 昭和55年1月19日 中国新聞「西大寺裸祭り 宝木のルーツ? 見つかる」
- ② 『昭和55年 西大寺会陽記録保存報告書』昭和55年 岡山市遺跡調査団
- ③ 「**備前会養**」寛政6(1794)『中陵漫録卷之五』日本随筆大成・第3期3 日本随筆大成編集部 1976 吉川弘文館
- ④ 『岡山の会陽』三浦叶著 昭和60年 日本文教出版(株)
- ⑤ 『しんぎ(宝木)』青江文次 西大寺第10号 昭和59年
- ⑥ 「**西大寺の会陽 宝木の由来伝説**」『日本の伝説12 中国』日本伝説拾遺会 教育図書出版 1973年 山田書院
- ⑦ 『樹木大図説』上原敬二 昭和36年 有明書房
- ⑧ 『岡山県の会陽の習俗 総合調査報告書』平成19年(2007) 岡山県教育委員会
- ⑨ 「**堤芳男先生と備前西大寺会陽**」丸谷憲二『堤芳男著作集 日本人』平成21年11月 堤芳男著作集刊行会
- ⑩ 「頭痛コラム **浅草寺と楊枝浄水加持会風景**」『頭痛教室ニューズレター』第3号 平成16年4月 北里大学病院

- ⑪ 「折楊柳」『鑑賞 中国の古典 16 李白』笈久美子 昭和 63 年 角川書店
- ⑫ 『柳の文化史』柳下真一 平成 7 年 淡交社

齒木（楊枝）

- ① 宝暦 2 年（1752）西大寺観音開帳「齒抜薬壳」『撮要録』文政 6 年（1823）成立 昭和 40 年 日本文教出版
- ② 「齒の博物誌 高野山と楊枝地蔵」齊藤安彦 『あなたとサンスター』NO. 136 1995 年 9 月サンスター広報室
- ③ 『楊枝の今昔史』丹羽源男 昭和 59 年 諸林
- ④ 「古代インドで生まれた齒木」『おもしろ齒の博物誌』齊藤安彦 平成 13 年 創英社
- ⑤ 『楊枝から世界が見える 楊枝文化と産業史』稲葉修 1998 冬青社
- ⑥ 「楊枝浄水供」『蓮華王院 三十三間堂』平成 4 年 妙法院門跡
- ⑦ 「齒の美化と楊枝」『ものと人間の文化史 化粧』久下司 1970 法政大学出版局
- ⑧ 「齒と体の健康に薬木の楊枝」『齒無しにならない日本人』山賀禮一 1995 情報センター出版局
- ⑨ 「齒口に関する習俗」『民俗の旅 齒の神様』神津文雄 1991 銀河書房
- ⑩ 『お齒黒の研究』原三正 1994 人間の科学社
- ⑪ 「楊枝-五つの功德」『仏教植物散策』中村元 昭和 61 年 東京書籍
- ⑫ 『噛む 齒は生命』長谷川正康 1991 求龍堂
- ⑬ 「朝噛齒木」『南海寄帰内法伝』宮林昭彦 加藤栄司訳 2004 法蔵館

薬用植物学

- ① 『原色日本薬用植物図鑑』木村康一 昭和 56 年 保育社
- ② 『漢方と民間薬百科』大塚敬節 1968 主婦の友社
- ③ 『新編 薬用植物学』上下巻 小泉秀夫 昭和 15 年 大洋社
- ④ 「ヤナギ」『大和本草』白井光太郎 昭和 7 年 春陽堂
- ⑤ 「ヤナギ」『東西生薬考』大塚恭男
- ⑥ 『漢方薬入門』藤波恒雄 昭和 45 年 保育社
- ⑦ 『新訂原色牧野和漢薬草大図鑑』2002 北隆館
- ⑧ 『原色牧野和漢薬草大図鑑』昭和 63 年 北隆館
- ⑨ 『改訂 和漢薬』赤松金芳 昭和 45 年 医歯薬出版
- ⑩ 「柳」『和漢三才図会 15』寺島良安 1990 平凡社
- ⑪ 「ヤナギ類」『花とくすり 和漢薬の話』難波恒雄 1981 八坂書房
- ⑫ 「につぼんの民間療法の原点」『日本民間薬草集覧』1985 かのう書房
- ⑬ 「やなぎ」『民間薬用植物誌』梅村甚太郎 1989 科学書院

古代医学

- ① 『奈良時代医学の研究』服部敏良 昭和 20 年 東京堂
- ② 「大同類聚方における大巳貴神の御神方の所伝と薬物についての考察」槇佐知子『大美和 86 号』平成 6 年大神神社
- ③ 「柳」『くすり歳時記 古医学の知恵に学ぶ』槇佐知子 1989 筑摩書房
- ④ 「わが国の古代医術」『大同類聚方 第一巻 用薬部の一』槇佐知子 1992 新泉社
- ⑤ 『新注校訂 国譯本草項目 第九冊』鈴木真海譯 昭和 8 年 春陽堂書店

仏典

- ① 「仏教と医療」『仏教文化事典』菅沼晃 編集 1989 佼成出版社
- ② 『仏教植物辞典』和久博隆 1979 国書刊行会
- ③ 「弘法寺修正会法則（資料）」佐藤米司 『仏教と民俗 10』 昭和 48 年 大正大学内仏教民俗学会
- ④ 「千光眼観自在菩薩秘密法経」『大正新脩大藏経』第 20 卷
- ⑤ 「楊柳観音」『安流伝授紀要第四』 真言宗全書第 34 卷
- ⑥ 「楊柳枝観音」『小野類秘鈔身』 真言宗全書第 36 卷
- ⑦ 「十誦律卷第四十」『国訳一切経 印度撰述部律部六』 昭和 49 年 榊大東出版社
- ⑧ 「千手千眼観世音菩薩治病合薬経」 真言宗全書
- ⑨ 「千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼」 真言宗全書
- ⑩ 「国訳秘密儀軌 千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼」 真言宗全書
- ⑪ 「仏説呪齒経一卷」 東晋 竺曇無蘭訳 真言宗全書
- ⑫ 「妙法蓮華経薬草論本第五」妙法蓮華経二十八品

インド伝統医学アーユルヴェーダ

- ① 「人間の生命をみつめて インド伝統医学アーユルヴェーダに学ぶ」稲村晃江・金田博夫 『あなたとサンスター』
No.136 1995 サンスター広報室
- ② 『ニームとは何か 人と地球を救う樹』石見尚 片山弘子 国際開発のための科学技術委員会 2005 緑風出版
- ③ 「地獄蘇生縁起 善光寺縁起を中心として」嶋口儀秋 『仏教民俗体系 1 仏教民俗学の諸問題』 1993 名著出版
- ④ 「善光寺縁起」『続群書類従 釈家部第二十八輯上』大正 15 年 続群書類従完成会
- ⑤ 『律蔵経典群に見える仏教医学について—律蔵とインド古典医学の比較から—』影山教俊 日蓮宗現代宗教研究所
- ⑥ 「善光寺まいり」 五来重 1988 平凡社

アスピリン

- ① 「発熱 生命力のシンボル、ヤナギの効用」『調剤と情報』 1996 薬業時報社
- ② 『超薬アスピリン』平澤正夫 2001 平凡社新書
- ③ 『見直されたアスピリンの効用』藤村一 1982 海南書房
- ④ 「アスピリンを食べる」『納豆博士の食養生』須見洋行 1997 岡山リビング新聞社
- ⑤ 「ずばり対談 アスピリン療法による胃腸障害の不安に答えます」『消化器 now』日本消化器病学会の健康ニュース
2009 No.45 財団法人 日本消化器病学会

仏教医学

- ① 「歴史と伝統を持つチベット密教医学」二本柳賢司 中外日報 平成 6 年（1994）1 月 22 日
- ② 「物部神池のアカメヤナギ（ウラシロヤナギ）」丸谷憲二『土佐地域文化 第 11 号 茶特集』2008 夏至 朝倉精舎
- ③ 『ブツダの医学』杉田暉道 1987 年 平河出版社
- ④ 「仏教医学の道を探る」難波恒雄 小松かつ子 2000 年 東方出版

会陽研究への情熱さらに

「しんぎ」の起源はやなぎ

岡山の社員丸谷さんが独力で解明

西大寺会陽で裸群が暮らした「宝木（しんぎ）」は、その昔ヤナギだった。会陽について独自の研究を続けている岡山市西大寺上二丁目の社員丸谷憲二さんも、真実の会陽を写真で紹介する写真展を、同市西大寺中二丁目の西大寺信用金庫本店ロビーで開いている。西大寺会陽の「宝木＝ヤナギ」説を明らかにした写真や珍しい樹皮付きのしんぎなど、岡山県下各地の会陽に関する写真が集められており、丸谷さんは写真展を機に「会陽情報」の収集・研究にさらなる情熱を燃やしている。



丸谷さんが2年間かけ集めた「しんぎ」の写真は珍しいものばかり

丸谷さんが会陽に興味を持ったのは、仕事関係で会陽についての資料が欲しいと頼まれたのがきっかけ。調べてみると俗説が多く、正しい資料は西大寺観音院の坪井全広住職も携わった岡山市が

昭和五十五年に発行した報告書のみと分かった。それをもとに資料を作成していったところ、これ

会陽に関する写真集め 西大寺で写真展

までカシとされていた宝木が、実は「ヤナギ」という記述が見つかり、丸谷さんを含め地元の人もびっくり。今度は自力で、と本格的に資料調査に乗り出した丸谷さんは、ヤナギはインドや中国では重要な漢方だったことから「漢方が関係するので」と推定し、仏教医学の立場から解明できないかと研究を開始した。二年間の研究の結果、西大寺地区が重要な密教の布教地域だったことを突き止め、宝木（古い記述では心木）は、密教とかわりが深い仏教医学に欠かせない漢方の中で重要なかせ葉だった「ヤナギ」からいつしか「カシ」へと移っていったことが分かった。また、丸谷さんによると仏教医学から説明可能なものが多く、「江戸時代

丸谷さんは「今後はしんぎの一覧表づくりや、全国の似たような祭りを比較しながら、来年には岡山民俗学会で発表し、いつかは本として出版したい」と話している。写真展は二十八日まで、午前九時から午後三時まで、土、日曜日は休み。



TEL 086-222-0601
＝報道部直通＝



会陽研究の成果を岡山
民俗学会で報告した

丸谷 憲二さん



医学的効果に焦点当て 開基や発祥の周辺調査

岡山市西大寺に転勤で
住み始めて二十五年。日
々と解説を加えていつ
本の三大奇祭の一つとき
た。いずれもそれらがも
れる西大寺会陽を任人な
たらす医学的効果に焦点
りに見てきたが、得意先
の依頼で「ほんの概略を
調べるつもり」が四年近
くたつとも終わらない。
このほど研究成果を岡山
民俗学会の十二月研究発

表会で報告、「数年先には
本に」とさらなる意欲を
燃やしている。

岡山民俗学会の約二十
人の会員の前で、一般で
は手に入りにくい仏典を
掲げ、心木（しんぎ）宝
木とも書き会陽で投げ、
舞い合う、串牛玉（くし
ご）心木の前に投げる）

などなぞめいた言葉に次
々と解説を加えていつ
た。いずれもそれらがも
たらす医学的効果に焦点
を当てているのが特徴
だ。

研究を始めた当初、心
木は「ヤナギだった」こ
とを知った。ヤナギは風
邪などに効く漢方。そこ

から会陽解明に仏教医学
説を持ち込み、今では西
大寺観音院の開基などに
研究の幅を広げる一方、
写真展（三菱信託銀行岡
山支店ロビーで来年一月
十九日まで）で心木の写
真などを披露している。

「会陽の起源を探るた
めには古い形態の心木の
写真をもっと見る必要が
あるが、会陽発祥は仏教
伝来のころとも関係する
のではと思い、今後は案
として入ってきた茶も合
わせて考えているんで
す」とサラリーマン研究
家の意欲は尽きないが、
研究の狙いはあくまでも
「西大寺の活性化です」
と言う。

石川県出身。岡山市西
大寺上二丁目、四十八歳。

- 4 平成7年12月9日「岡山民俗学会・12月定例研究発表会」において
「仏教医学における柳について・備前西大寺会陽を題材として」とのテーマで発表。
- 5 平成8年1月27日「こころといのちを考える会・岡山1月定例学習会」
演題「仏教医学における柳について・備前西大寺会陽を題材として」 2時間講演。
備前西大寺会陽の起源について調査研究したところ、「仏典・漢方・現代生薬学の研究」
になってしまいました。「仏教の智恵について学びたい」というものです。
- 6 「アスピリンを食べる」『納豆博士の食養生』須見洋行 1997 岡山リビング新聞社
須見洋行先生（倉敷芸術科学大学教授・医学博士）専門は血栓症の研究
平成8年4月2日に岡山県立大学でご指導いただいた内容です。

「アスピリン」を食べる

洋の東西を問わず、確かに効くものと実感することがある。「アスピリン」もしかりで、実はこの薬、最近私たちが食べている食品と深くかかわっている。

岡山市西大寺の祭り「会陽」で、裸の男たちが奪い合う「神木（心木、宝木）」の研究をしている丸谷憲二氏にかつて伺った話がある。なんでも、神木は柳の木でできていて、仏教医学では柳は万能薬であったそうである。

一方、ヨーロッパでも古くから、柳の木の皮を煎じたものは、解熱、痛み止め、そしてリウマチの薬として使われ、1830年には、その煎じたものからサリシンが結晶として取り出され、また1953年には、その誘導体のアスピリンが合成された。

サリシン、また、かつては日本酒などに防腐剤として添加されていたサリチル酸は、すべてアスピリンの仲間である。「超薬アスピリンで成人病を防ぐ」（草思社、1995年）によれば、心臓病からがんの転移まで、某メーカーの小児用アスピリンを毎日半錠飲むことで大きな効果があるそう。ただし、アスピリンは大変安い薬で、この療法にかかる薬代も1日5円ばかりと安すぎる。ところが、病院で勧められない理由とか。

ところで、今年になってアメリカ心臓病協会（AHA）主催の「心血管疾患の疫学と予防」に関する会議に出されたニュースは大変興味深い。

これによると、毎日アメリカ人が食べているアスピリンの仲間の総量は、1日当たり10〜200ミigramにも達するそうで、この量は心疾患の予防に有効と考えられているアスピリンの推奨量（40〜80ミigram）に十分というもの。

アスピリンの仲間はオレンジやトマトなどの野菜や果物、またスパイスの多くに天然タイプのものが含まれるほか、保存料や風味増強剤として添加されているものも多い。さらに化粧品に使われているものは皮膚を通して吸収される。

そして、こうした加工食品を食べるようになった1960年代半ばから、アメリカでの心臓病疾患がぐっと減ってきたというのである。災い転じて福となつているのかもしれない。

さて、岡山は旭川にしろ、高梁川、笹ヶ瀬川といった川にしろ、河川敷には柳が多い。6月ごろ、その枝を切ってきて花瓶に挿しておく、1週間ばかりで根が出てきて、水もまったく腐ることがない。私は大学への道すがら、その葉っぱをサラダのようにして食べることができたら、きっと素晴らしい柳の神秘にあやかれるのではと思っている。

(1996.9.14)

- 7 2001年6月18日 HP「宝木伝説」公開 <http://mryanagi.hp.infoseek.co.jp/>
江戸時代までは寺社は病院であり薬局でした。
寺社の神木材質を薬用植物学にて解析することにより、寺社の医薬の専門分野がわかります。「会陽のシンギ」・「蘇民祭のヌルデ」・「蘇民のチガヤ」・「熊野の神木 イチイ」等を薬用植物学にて説明しています。
- 8 平成18年6月16日 岡山県立図書館・電子図書館システム「デジタル岡山大百科」に「会陽って何だろう」を公開
<http://djv.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/kenmin/eyo/eyo-index.htm>
- 9 平成19年1月13日 岡山県立図書館 デジタル岡山大百科活用講座
演題「会陽ってなんだろう」 2時間講演。
- 10 平成19年2月6日 知研岡山 2月度講演会 岡山県立図書館
演題「薬用植物学による神木(宝木)の解析」 2.5時間講演

- 11 平成 20 年 2 月 13 日 岡山県立図書館 デジタル岡山大百科活用講座
演題「会陽の起源への挑戦・17 年目の中間報告」 2 時間講演。
- 12 平成 20 年 3 月 10 日 千手山弘法寺 遍明院
法話『会陽発祥寺院 千手山弘法寺・弘法寺と備前西大寺』 1 時間 20 分講演
- 13 2008 年 5 月 18 日 第 113 号『しじみ』日本共産党講演会ニュース
「真木と宝木 昭和 6 年祝主資料の紹介」



- 14 『土佐地域文化 第 11 号茶特集』2008 年夏至 朝倉精舎
「物部神池のアカメヤナギ(ウラシロヤナギ)」丸谷憲二
「仏教医学におけるヤナギについて」詳細に報告。
高知大学人文学部 肖 紅燕(Xiao Hongyan)先生の依頼により寄稿。
- 15 『堤芳男著作集 日本原人』平成 21 年 11 月 堤芳男著作集刊行会
「堤芳男先生と備前西大寺会陽」丸谷憲二
北海道大学埋蔵文化財調査室 遠部慎先生の依頼により寄稿。